

留学の帰途ヨーロッパ回りで帰国することはかなわなかったが、ヨーロッパを訪れる機会は意外に早くやってきた。当時、NHKではゴールデンアワーの7時半から30分の海外取材番組という放送枠があって、世界の各地を取材して、それぞれテーマにしたがって7週間シリーズで放送していた。テレビ岩倉使節団のようなものである。

1963年に帰国して4年後の1967年に、私はまだ20代で取材班に選ばれた。テーマは『教育の時代』で、アメリカとヨーロッパをまわって世界の教育事情を取材して放送するという啓蒙番組であった。総合テレビの7時半からの番組で、田崎先生の英会話は教育テレビの7時半からの番組だったから、ライバルになった。まだ海外取材が珍しい時代であった。

東京オリンピックの後だったものの、まだ外貨事情はよくなく、大蔵省に申請して割り当ててもらっていた。フィルムなども海外でコダックとかアグファを買えばいいものを、わざわざ日本からフジフィルムを持って行って、日本へ送り返して日本で現像した。

アメリカではスプートニク・ショック以降、科学教育に力を入れていて、幼稚園からヘッドスタート計画（格差をなくす教育）が推進されていた。スタンフォード大学ではCAI(computer aided instruction)といって小学校からコンピューターを使った教育がすでに試みられていた。また、教室の壁を取り払って「壁のない学校」という試みも行われていた。教室を星型に配置して教師が一方的に教えるのではなく、子どもたちがお互いに学びあうという新しいコンセプトによる学校建築なども取材した。

私が留学時代を過ごしたニューヨークのグリニッチ・ビレッジでは、数年前のビートニックはヒッピーと呼ばれていた。

取材費が潤沢でなかったから、留学時代と大して変わらず、安いホテルを探し、モーテルのようなところにも泊まった。まだ日本食堂はほとんどなく、昼飯などハンバーガーですませようとする、カメラマンがスパイスの臭いが気になって食えないという。飯をたべないと力がでないというから、どこへ行ってもまず電話帳で中華料理店を探しておいて、チャーハンを注文した。日本にはじめてマクドナルドが進出したのは1971年であり、一号店は銀座三越であった。

アメリカから始まった取材はフランス、イギリス、西ドイツ、スウェーデン、ポーランド、イタリア、イスラエルの8か国をおよそ80日間で回ってシリーズ番組を作ることになっていた。ニューヨークからフランスへ向かうエール・フランスの飛行機では、フランス語のアナウンスが流れてきて緊張した。出発前にリングフォンのフランス語版を買って、にわか勉強してはいたが、英語圏を離れるのははじめてだったので、これで取材ができるだろうかと心配であった。

オルリー空港に着くと、取材用のカメラなどを税関に申告しなくてはならない。現在のフランスでは空港でもホテルでも英語が通じるが、フランス人は誇り高く、当時はほとんどフランス語だった。ヨーロッパでは自家用車などで国境を越えて隣国へ行き、その車で自国へ帰るといようなことが多く、その場合カルネといって、車にかかる関税を保留してもらうことができる。これを取材用の機材に適用してもらう交渉をしなければならない。しかも、フランス語で。「これは取材用で、フランスで売るものではない。フランスを出国するときにはまた持ち出す物だから税金をかけないでほしい」という文面の書類を、フランス語で作ったものを日本で用意してもらっていたが、それを黙って渡すわけにもいかないから、生まれてはじめてフランス語を使った。パリ支局のカメラマンが空港まで迎えに来てくれていて、パリ支局にあいさつに行くと、今度の取材班の若いディレクターはフランス語がペラペラだという噂がひろがっていた。しかし、翌日から取材にでると、話すことは英語交じりの変なフランス語でなんとかなるが、相手の話していることが全くわからない。こういう場合、英語もフランス語も話さないカメラマンのボディー・ランゲージのほうが子どもなどにはよく通じることがある。

その後もパリへは、カンヌのテレビ映画祭の行き帰りに何度か立ち寄ることが多かったが、空港やホテルはもちろん、フランス人も英語を話すようになっていった。ある時ちょっとフランス人にインタビューする必要があるとパリ支局によったら、支局長が「小林さん通訳はどうしますか」と聞く。私は「英語でやりますからいいですよ」と言ったら、支局長が「偉い人には英語では失礼ですよ」といって、急遽商社マンの奥さんを通訳として手配してくれた。しかし、にわか通訳のフランス語より、私の英語のほうが通じたし、インタビューの相手も英語で応じてくれたので、インタビューは結局英語で行うことになった。

イギリスではケンブリッジ大学の tutorial（個人授業）などを取材した。オックスフォードやケンブリッジは貴族などの膨大な寄付によって支えられていて、孫の代まで同じカレッジ（学寮）に入ることができるらしい。ケンブリッジ大学は30もあるカレッジの集合体で、キングス・カレッジとかトリニティー・カレッジ、コーパス・クリスティアー・カレッジなどがあって、それぞれ独立性をもって運用されている。フランスにワイナリーを持っているカレッジもあって、ワインを飲みながら教授とさしで授業を受けることもできる。確かに社会の仕組みがアメリカとはちがう。BBCでも貴族出身の部長と庶民出身の課長がいれば、貴族出身の部長はオックスブリッジ（オックスフォード大学とケンブリッジ大学）のポートレースのエンブレムとか、アルプス登山記念のピッケルなどが飾ってあるのですぐわかる。

イギリスでは日本の大使が、私たち取材班とロンドン支局長を大使公邸に招いて和食をごちそうしてくれた。当時まだ、日本からの客はそう多くはなかったのであろう。日本を出てからひと月ぶりで食べる日本そばのおいしかったこと、今でも舌が覚えている。大使は専属の料理人を連れて行ってもいいことになっているらしい。和食で現地の要人をもてなすこともあるからであろう。大使は「イギリスのカレーはうまいですよ」と言ったので、早速

翌日街で食べてみた。インドはもとイギリスの植民地であったため、ロンドンにはインド人のカレー屋が多い。そのころ日本のカレーは蕎麦屋のカレーのように小麦粉でとろみをつけたものが多かったが、イギリスのインドカレーは肉と野菜のスープで、確かにおいしかった。

スウェーデンでは高校の卒業式、ウプサラ大学などを取材した。ウプサラ大学の図書館にはスウェーデン語の本と並んで、ドイツ語や英語の本が、ほぼ三分の一ずつあったのには驚いた。高校生のグレタ・トウンベリさんが流暢な英語で自分の考えを国連で発表できるのも、こうした教育環境によるものであろう。洋書をいえば丸善で取り寄せ、学校英語ではむずかしい英語を訓読学のように翻訳し、小学校で英語を教えると言えば美しい日本語が乱れるなどと言っている国とは全くちがう。ことばを話す能力は「ゼロ・サム」（一つの言語が上達すればもう一つの言語がだめになる）というものではなく、人間は一つ以上の言語を習得する潜在能力をもって生まれてくる、というのが最近の言語学の定説である。私はこの説を信ずる。

世界会議の事務局をしていたことが役にたって、どこの放送局へ行っても東京で会ったことのある人がいて親切にしてくれた。スウェーデンでは魚料理が多く、日本人の口に合った。バイキング（スウェーデンではスモガスボードという）は特に気に入った。付け合わせにグリーン・アスパラガスが出たので、全部食べてスウェーデン人のお皿をみたら、穂先だけ食べて茎の部分は残していた。よく見てから食べればよかったなあ、と思った。当時日本ではクレードル印の缶詰のアスパラガスで、白いものしか見たことがなかった。現在東京にはスモガスボードのレストランが赤坂見付に一軒だけある。

ポーランドは共産圏で当時入国しやすい国だったので選んだ。ショパンの生家の庭でショパンのピアノ曲の演奏を聴いたのは忘れられない。取材の方は、ピオニール（少年団）などを取材したはずだが、よく覚えていない。ポーランドはドイツに侵攻され、続いてロシアに踏みにじられた国である。この国の悲しみに満ちた歴史のみが深く印象に残った。石の壁には銃弾の跡がまだ無数に残っていた。後にジェームス・ミッチェナーの『ポーランド』を読んで、その国でその時代を生きたポーランド人の物語が生き生きと描かれていて感動した。

ドイツでは BMW の自動車工場、アルプスのふもとのバイオリン製作学校などを取材した。ドイツにはマイスター制度というものがあって、職業訓練制度が充実している。そのため、アメリカの大量生産と違って自動車にもバイオリンにも手作りの技術が精巧な製品を支えている。自動車工場では locksmith（鍵職人）の伝統を受け継ぐ職人組合の若者が働いていた。この取材では、ベルリンの壁の向こうへは行くことができなかったが、その後ポイント・チャーリー（検問所）をバスで越えて東ベルリンに入ることができた。ベルガモンの

大祭壇が復元された遺跡の壮大さに目を見張った。大英博物館のパンテオンにも匹敵するのではないかと思われた。しかし、行動はすべて団体行動で、電球をつくる工場を誇らしげに見学させられたのには閉口した。有名なエジプトの女王ネテルティッティの頭部の像はまだ、西ベルリンの小さな美術館に収蔵されていた。

イタリアではモンテッソリ幼稚園の教育などを取材した。ローマは1964年の東京オリンピックの前の1960年大会が開かれたところで、東京でもフォロ・ロマーノの大理石の石柱をデザインしたポスターなどをよく見かけていたので、コンスタンチヌスの凱旋門、コロセオなどを見下ろすフォロ・ロマーノに立ったときは感激した。トレビの泉ではローマの休日のオードリー・ヘップバーンにならってコインを投げ入れた。

そのご利益あってか、1983年には再びローマを訪れる機会に恵まれた。テレビ番組の国際コンクールであるイタリア賞の審査員としてイタリア放送協会から招かれたのである。コンクールはカプリ島で開かれ、一週間目は番組の審査をして、次の一週間は自由にイタリア国内を見てまわるというものであった。ポンペイの遺跡、イタリアルネサンスの都フィレンツェやベネチアのカーニバルを見たり、オペラを鑑賞したのも忘れがたい。そして最後にナポリに戻ってナポリのオペラハウスで授賞式が行われた。取材のときは一週間で一本の番組を作るというハードスケジュールだったので、イタリア賞への出張は夢のようであった。イタリアは食べ物もワインもうまい。私は今でもイタリアが大好きだ。イタリアは歴史も長く、文化も深い。イタリア人は人生を楽しむことを知りつくしている。そして客人をも楽しませてくれる。物価はユーロになって、昔よりだいぶ高くなったが、イタリアは今でも世界で一番魅力ある国である。

イスラエルへ入ったのは六日戦争の直後で、エルサレムへ向かう道路わきにはまだ壊れた戦車が放置されていた。嘆きの壁では正統派のユダヤ教の服を着たユダヤ人が、壁をなでて涙していた。イスラエルではキブツ（協同生産組合）の学校を取材した。イスラエルでは義務教育は5歳からであった。ホテルでベッドのシーツを取り換えに来てくれた女性が腕に数字で小さな入れ墨をしているのに気がついた。彼女はアウシュビッツの生き残りで、入れ墨は収容所の囚人ナンバーだった。

7本のシリーズが終わると総集編も放送された。しかし、番組は残っていない。当時のビデオの機械は一台2000万円もしていて、テープは2インチ（約5センチ）幅であり、放送したら消して次の番組を収録していた。

番組の取材記は『教育革新の時代』として出版された。私の手元に残っている本は昭和48年版で第11版とあるから、かなり長い間売れたらしい。

放送の内容は次の通りである。

第1回 六歳では遅すぎる（アメリカ・イタリア・イスラエル・イギリス）

- 第2回 ひとりひとりを生かす (ポーランド・アメリカ・フランス・イギリス)
- 第3回 進学への道 (フランス・スウェーデン・アメリカ)
- 第4回 大学の理想を求めて (ドイツ・イギリス・アメリカ)
- 第5回 働きながら学ぶ (西ドイツ・ポーランド・イギリス)
- 第6回 市民学校 (イタリア・フランス・スウェーデン・アメリカ)
- 第7回 あすをめざす教育 (イスラエル・アメリカ)
- 総集編 教育の時代と日本

**【予告編】**

第9話 アジア回帰

第10話 アメリカ NOW